

『ああ、君の願いが少しでも叶えばいいのに。僕のことをずっと忘れなければいいのに』

夏希が小説を開きながら、いつもより少し低い声でそう言い始めた。また夏希が本の読み上げを始めた。茹だるように暑い中、夏希はショートパンツにゆつたりとしたパーカーを着ている。ただでさえ童顔なのだから、もっと大人っぽい服を着ればいいのに、夏希はいつもへらりと笑うだけだった。この前だって高校生なのに中学生と間違えられて、うだうだと文句を言っていた。腹いせにさつき冷蔵庫からとり出したオレンジジュースを夏希に投げてみた。夏希は驚きもせずそれをパシつと掴み、ニイと笑ってこちらを見る。運動神経はいいくせに、運動はしない。僕と真逆で羨ましかった。

「今回は何読んでるんだ？」

夏希は無言で僕に本の表紙を見せてきた。そこには夕暮れの中に佇む一人の少女と、深い緑色で『相合傘は君に傾けるよ』と書かれていた。確か兄さんからもらったけど積読にしたやつだ。

「どんな話？」

そう聞くと無言で夏希は裏表紙を見せてきた。あの日、君はいなくなつた——から始まって小さな文字が

行列を作っている。多分恋愛小説のような気がする。恋愛経験が皆無の僕は恋愛小説には共感できなくて、あまり読むのが好きじゃなかった。夏希は受け取ったオレンジジュースのプルタブを開け、中身を二口ほど飲んだ。缶に中身を確かめるようにゆらゆらと揺らしながら夏希は僕を見て言う。

「この小説好きじゃないよ。」

やけに運動と人付き合いが上手い夏希のことだ。僕の本の好みとか、夏希に向けてる感情とか全て汲み取った上でこう言ってるのだろう。ホントは恋愛小説とかそういう漫画が好きなくせに。前だって恋愛漫画が原作の映画を見に行つてたし。でも僕は夏希の掌で転がるのが嫌いじゃないから気づかないふりをする、けど。僕は手の中のオレンジジュースの缶を開け飲んだ。甘い。口の中が少しべたべたする。

「どんなところが嫌い？」

僕がそう聞くと、夏希はうーんと唸って、唇を尖らせた。オレンジジュースをまた、一口飲んで僕から目を逸らす。

「好きじゃない理由なんて、分かんないよ」

ふーん、と僕はそっけなく返事をした。夏希の視線がゆらゆらと揺れる。夏希の嘘をついてる時の癖だ。

僕は夏希から視線を逸らし、本棚を見た。やっぱり、夏希は本棚いっぱいあるミステリじゃなくて、ラブス

トリーを選んだ。ほらね、夏希は恋愛ものが好きだ。夏希は僕の自信ありげな瞳を無視して、また本を読み上げた。

「僕が明日死んだらどうする、と僕は酒に酔った振りをしてそう聞いた。別に彼女を試しているわけではないし、なんと答えられても良いけど……。彼女は下を一回向いて、それからゆっくり僕の方を見て甘美に死体を焼くわ、と答えた。彼女もまた僕と同じように酔った振りをしてそう言った。」

「なんかその台詞、アレみたいだね。ほら、あの、」

「二葉亭四迷の『死んでもいいわ』？」

「そう、それ」
小さいころから一緒にいる夏希は僕の考えてること大体わかってくれる。だから他人と話すとき夏希ならわかってくれるのとか考えてしまう。そのせいで僕には友達がいらない。夏希といるときの居心地が良すぎるのが悪い。僕のコミュカとは関係ない。夏希さえいなければ、友達がいたはずだ。ふと窓の外を見ると飛行機が飛んでいた。

「ねえ、酔うってどんな感覚？」

夏希が呆ける僕に聞いてきた。未成年で真面目な僕が分かるわけないじゃないか。

「知らない。でもまあ理性が外れたみたいになるらしいよ」

ふーん、と興味ありげに夏希が呟き、オレンジジュースの缶を机の上に置く。あ、また変なことに興味を持った。今まで夏希のこんな飽くなき探究心には二回出会ったことがある。

一度目は小学生の時。男子トイレの気がなくなったらしくて、放課後、僕と夏希で中を覗いた。僕は勿論普段から見ても、入って、使ってる側の人間だから全然気にもしてなかったけど、夏希は立ってするあのシステムとか、床が女子よりも汚いところとかを指摘してケタケタ笑っていた。

二度目は高一の時。今日みたいな溶けそうに暑い土曜日、いきなりそういうビデオが見たいと言いつつ、それも僕の家の前で、堂々と。僕は勿論、最初は丁重にハッキリと断ったが、そう言うとき夏希は他の男子の家で見ると言い出した。だから仕方なく家に入れた。夏希はこう言えば僕が言うことを聞いてしまうことを知っている。いつも夏希の言いなりになってしまうのは、悔しい。別にいいんだけど。そのときは図らずも僕は父さんのDVDの隠し場所を知っていた。だからすぐに夏希の要望には応えられてしまった。バクバクなる心臓を抑えて必死の思いでプレイヤーにDVDを入れた。なのに夏希は、初めの自分のよくわからないインタビュのところまで飽きてさっとテレビを消して、今日はこれ教えて欲しいと数学のワークを取り出した。

夏希は、別に、DVDを見たかったわけではなかったらしい。今でも文句の一つでも言ってるやうな思っているけれど、また見たいと言われても困るし、僕はあの時のことを蒸し返そうとは思わない。

どうせ夏希は酒を飲みたいって言いだすんだ。冷蔵庫にはビールがあるし、僕は気がついたら夏希に丸め込まれてるんだ。夏希に抵抗しようなんて無駄なこと。そう腹を括った矢先、夏希は僕に向かってニヤリと笑う。

「ねえ、お酒、飲んでみよっか？」

やっぱり。僕の返答を待たず、夏希はキッチンに駆けていった。夏希の後を追うと、案の定、すでに夏希はビールを二本、手に持っていた。あつた、と呟きながら僕にビールを投げた。夏希みたいにそれを上手く取れなくて床に落とすと、夏希はケラケラ笑った。むつとしながら僕が自分の部屋に向かうと、アヒルの子供が親について行くように夏希は僕の後を追った。

机には飲みかけのオレンジジュースが二本残っていた。持つてみると案外重たくて、振るとちやぶちやぶと音がした。それを端に退かし、ビールを置く。夏希もその隣にビールを置いて、一旦ベッドに座る。

「ねえ？私たちちつていくつだった？」

「十七」

二本のビールを眺めながら僕は答えた。夏希は僕の

返事を聞いて満足げに笑った。確かに未成年は飲酒してはいけないし、バレたらヤバいってこともわかっている。ついでに実は酒を飲んでも逮捕されたり、有罪になったりはしないってことも。だからというわけではないけど、夏希が飲みたいと言うのなら飲んでもいいと思った。夏希の言うことを聞いてしまう自分が嫌になって、小さくため息をつく。

「飲んだことある？」

「ない。夏希は？」

「さあね」

夏希はそう言ったけど僕と同じように、糖質ゼロや未成年飲酒禁止とか、企業ロゴでごちゃごちゃした缶をじつと見つめていた。膝を折り曲げて、じつと。敵から身を守る小動物みたいだった。いつもは十七特有の大きな態度で、小さな胸を張ってるくせに。

しばらくすると、夏希はプルタブに手をかけた。僕も夏希に合わせて缶を開ける。プシツという音とともに水蒸気だかなんだか分からない白いモヤが缶の中から出てきた。そのモヤとか、背徳感とか、罪悪感とか、夏希への気持ちとか、全部全部胃で消えてなくなってしまうことを願いながらビールを口に含んだ。酸っぱくて、甘くて、でもとにかく苦くて、なんだか夏希みたいだと思った。

夏希の方を見ると、驚いたような嬉しいような顔を

して、馬鹿だなあと僕に向かつて呟く。目を瞑りながらプシッと缶を開け、一気に煽った。夏希の喉は数回音を出しながら凹んで、夏希は少し荒々しげに缶を机の上に置いた。

「ねえ、拓也って童貞？」

笑いを含みながら夏希が唐突にそう聞いてきた。たぶん夏希は酔ってる、絶対。夏希は僕たち二人のそういうことについては今までにも言っただけでなかったから。

「ねえ？」

お菓子をねだる子供のようには、僕の答えをねだってきた。いつもの大きくてクリクリしているはずの眼を細めて、僕に近づいてきた。もしも、仮に、この世の全ての男を誘惑する悪魔がいるとしたら、夏希みたいな妖艶で可憐で残酷で無慈悲な悪魔だと思う。その悪魔に翻弄されてしまっている僕も僕だ。夏希はまたぐいっとビールを煽った。こくり、こくりと喉が鳴る音が部屋中に響いている。いつもは何気ない音も何故か異様に良く、耳の奥底まで響く。トンツと軽い音をさせ、夏希がテーブルに缶を置く。

「そうだよ」

諦め気味にそう言うと、夏希はへらっと笑った。嬉しそうに、そうか、やっぱりそうか、と言った。わかっただけなら答え聞くなよ。夏希は僕をじいじと見た。

奴隷を品定めする商人みたいに。

「夏希は？」

夏希にそう聞くと、アハハといきなり大声で笑って、どうだったか拓也は嬉しい？と質問で返してきた。その返しはずるいと思う。

夏希は昔から僕の五歩くらい先を行っていた。運動も、友達も、ファッションも、恋愛も。僕は夏希についていくのに必死だったから、それを悔しいと思う間すらなかった。でも夏希の背中だけじゃなくて、横顔を眺めながら明日のご飯の話をしてみたかった。そう思うと鼻の奥が少しツンとして、口の中が微かにしよつぱくなつた。

「こっち来て」

夏希がベッドの上を二回トンツンと叩いた。母性が滲み出ている、マリアのような、天使のような、そんな顔をしている。街灯に群がる蛾みたいに、僕は夏希の横にふらふらと近づいて、ボスンと音を立てて隣に座った。

夏希はそんな僕の頭を撫でて、意地悪そうに嗤った。喉の奥の方から音を出すように、ククって。

「捨てちゃう？」

夏希は僕の返答も待たず、ボスンと僕をベッドに押し付けた。夏希の顔は夕日で染まったみたいに赤い。夏希が僕のシャツをばつと捲る。ズボンのベルトを

外して、チャックを下ろした。少し冷たい風がスウと体を通り抜ける。その瞬間、僕のふわふわと漂っていた意識が戻ってきて、このままじゃダメだと思った。案外細い夏希の腰を掴み、そのまま僕の右側に力を入れて押し込めた。夏希は呆気なく僕と立場が入れ替わった。僕が上で夏希が下。それで夏希が僕にした行為をなぞるように、夏希の服を脱がせた。夏希は僕にされるがままで、抵抗はしなかった。玉ねぎの皮を剥いているみたいだなと思った。夏希の身体は想像していたモノの五倍は白くて、綺麗で、細くて、触ったら壊れてしまうような、薄い氷の上に立ったバレリーナみたいだった。自分が何を考えているかわからないまま、僕は無我夢中で夏希にむしゃぶりついた。

夏希の下着を剥くとそこには小さい胸がふたつあった。夏希は勿論人間なんだからそりゃ胸が二つあるだろうけど、僕はなぜかそれにびっくりした。心のどこかで夏希はなんだか人間ではない気がしていた。目を見開く僕に夏希は笑って、僕の頬を優しく撫でた。少し冷たい手が僕のことをそそのかしているみたいだった。ぎゅっと夏希に抱きつくと、夏希は笑う。

それからはもう必死で夏希の身体を撫で、舐め、見つめた。夏希は僕の拙い触り方にも声の掛け方にも、全部笑うだけだった。遂にそういう雰囲気になり、は

いとコンドームを渡された。僕がそれにびっくりしていると夏希は笑って淑女の嗜みよ、と言った。そんな夏希が少しも怖くなかったと言えば嘘になるけど、夏希は綺麗だった。ゴムを破かないように丁寧に包装を開けて、先端の空気を抜き、着けた。夏希はそれを静かに見ていた。夏希の身体をグッと押し倒し、さあ挿れるぞというときになって、夏希は、待ってと言った。それで僕の口に触れるだけのキスをする、おいで、と言った。夏希らしくない、ちよつと低い声で。

行為が終わった後のベッドのシーツにはお互いの汗とか体液とか血液とかがぐちゃぐちゃになっていた。それを見ながら、夏希の表情を思い出す。夏希は満足してくれただろうか。そうだったらどんなにいいだろうか。慣れないことをして疲れた体でそんなことを考えた。眠さと怠さに身を任せて眠りにつく。ここ最近で一番気持ちの良い入眠だった。

はっと目を覚ますと服を着た夏希が隣で寝ていた。時計を見ると、もう六時半で、僕は急いで夏希を揺り起した。んっ、と悲鳴に似た声を出しながら夏希は気怠げに目を覚ました。もう六時三十分だと伝えると、夏希はヤバッと呟いてベッドから滑りおりた。そして

僕に小さくバイバイと手を振るとさっさと帰ってしまった。

身体を一度重ね合ったからと言って僕たちの関係は何も変わらなかった。良い意味でも、悪い意味でも。僕もそれを望んでいたと思うし、夏希もそうだと思う。夏希から出た血はベッドのシーツにへばりつき、洗濯しても落ちなかった。あんなに、自信ありげに行為に持ち込んだんなら、染み抜きの仕方くらい教えてくれるもいいじゃないか。処女だったくせに。